

振り向けば
せつなくて



君島恒星

まばらな拍手が、劇場内に響いていた。

小学校6年生の最終演奏者がおじぎをして、『小山ピアノ教室発表会』が終演した。

もしも娘の麻衣が生きていれば、ちょうど同じくらいだろう。年頃の子を見ると、いつもせつなくなってしまう。悪いくせだ。

身内ばかりの拍手がすぐに落ち着くと、僕は慣れた手つきでフェーダーを下げた。そして、記録用のメモリーカードを機材から取り出し、音響室を出る。

「お疲れさまでした！」

元気な声が楽屋をにぎわせていた。この解放感のある雰囲気が好きだ。データを受け取り、何度も頭を下げる主催者の女性に、何度も頭を下げながら楽屋を離れ、舞台に向かう。そして、備品の撤収にかかった。僕は劇場の音響の仕事をしている。

撤収を一番に終えてスタッフ事務所に戻ると、デスク兼楽屋担当の大川さんに声をかけられた。いつも笑顔を絶やさない、好感がもてる、おばさんだ。

「お疲れさま。大島さん、もうすぐですよ、娘さんの命日」

「記憶力抜群ですね。もう12年も前のことなのに」

「大島さんがここに来たときの事だから、忘れられないのよ。いつも同じ物だけど、はい、お線香」

「いつもすみません。気にしてくれて」

「わたしも子供を亡くしているから、気持ちはよくわかっているつもりよ。何年たっても忘れられないものだわ。翔太くんは元気？」

「おかげさまで、もう中学3年だから。親父のことなんて眼中になくて...」

「誰でもそんなもの、ひとり立ちしていくのよ。それから、正式に明日の催し物が中止になったわ。打ち合わせもないし、舞台の西山さんが出勤するって言っていたから、休めますよ？」

「休日もたまっていることだし、休もうかな」

「急な休みって、こまるのよね？ ああ、大島さんはそうでもないわよね。川が近いから、いつでも好きな釣りが、すぐできるから。理想の生活ですよ」

「通勤時間さえ気にしなければ、けっこういい暮らしじゃないかな？」

「うらやましいわ。あっ、お疲れさまでした」

大川さんは笑顔を外に向けながら、帰る出演者たちに挨拶をした。

大川さんは昔、3歳になった息子さんを交通事故で亡くしていた。

「人は会っただけじゃわからない悲しみを、背負っているのよ」

と言うのが口癖だった。

僕の娘は病気の身体で生まれ、すぐに亡くなった。それでも、かなりのショックをうけた。幼稚園に入園して間もない息子さんを亡くした、大川さんがどれだけの悲しみだったか、うかがい知ることなどできない。死というものを比べられるとは思わないが、僕の方がよほど楽だったろう...回りの人たちに、また産めるのだから頑張りなと言われたけど、娘が亡くなった後、僕たち夫

婦は子供を産もうという気には、どうしてもなれなかった。それは、亡くなった娘への愛情表現からなのか、臆病心なのかはわからないが、尾を引いていたのは確かだった。

僕は多摩川が好きだった。生まれ育ったのが、多摩川の近くだったので、子供の頃はよく自転車で遊びに来ていた。特に、水の流れが好きだった。川の流れはいつも同じように見えるけど、決していっしょではない。今流れた水は、下流に流れていく。1日中見ても飽きない風景なのだ。それに、子供とキャッチボールをするのが夢だった。男の子だったら少し大きめのグローブを、女の子だったら赤いグローブを買ってあげたかった。翔太とは、河川敷で暗くなるまでキャッチボールをした。理想の思い出をつくることができた。

家は多摩川沿いの建て売りを、ローンで購入した。上流に行けば行くほど価格は安かったが、どんどん遠くなり、都内に通勤することができなくなってしまった。ぎりぎりのところで妥協するしかなかった。

川には必ず橋がかかっている。その橋の下の空間も好きだった。多摩川の橋はどれも大型のものなので、橋の下といっても窮屈な感じはしない。逆に急な雨などの時には、絶好の場所だった。何故か心地よい懐かしさや切なさを感じてしまう。子供のころ無口な父と、橋の下で釣りをするのが楽しみだったからだろうか。

その日も、いつものように橋の下で釣りをしていた。でもちょっと感じが違う...誰かに見られているような、首筋がゾクゾクするような、そんな気がしたのである。僕は振り向き、自然と橋のたもとに視線をそそいだ。

いつからいたのだろうか？

そこには、僕の方に手を振っている少女が座っていた。中学生くらいの、幼さを感じる子だった。

思わず目をそらした。

知り合いではなかったからだ。でも、回りに人はいない。対岸にも人影は見えなかった。

不思議な感じを受けた。彼女は僕に手を振っているのだろうか？

少女は立ち上がり、スカートについた汚れをはたきながら、近づいてきた。

「お父さん、なかなか気がつかないから、無視されているんじゃないかと思っちゃったわ」

少女は、怒ったふりをしていて。本心は会えてよかったと思える表情だった。女の香りが、鼻を刺激した。

僕はびっくりした。

「お父さん？ 僕が？」

「当たり前じゃない。他に誰がいるの？ ねえ、釣れている？」

「いや...ちょっと、ふざけないでほしいな」

「わたしは、ふざけてなんていません。ひどいわ...お父さん、ひどい」

少女は泣きそうな顔になった。

「僕には娘はいないよ。息子がひとりいるだけだ」

一瞬、翔太の彼女かとも思った。だとすると随分と大胆な娘だ。

「お父さん、ふざけないで！ わたしは麻衣よ。自分の娘を忘れたの？」

「麻衣？」

僕の身体は固まってしまった。

麻衣は確かに僕の娘だった。もちろん、生きていればの話だ。12年前の事だが、麻衣は生まれすぎてすぐに亡くなったのだ。僕たち夫婦の長女だった。

「娘の名前を聞いておどろかないでよ。それとも本当にわからないの？ お父さん、おかしいわよ」

心配そうに僕を見つめる少女の瞳は、決して狂っている目ではなかった。それよりも、情熱と躍動感が感じられた。

少女は嘘をついていない。

では、僕が狂ったのか？ 娘が、わからなくなってしまったというのか？

「どうも僕には、今のこの状況が、受け入れられないんだよ。話を整理させてほしいんだけどいいかな？」

「もちろんいいけど。大丈夫？」

相変わらず少女は、心配そうに僕を見ている。

「とにかく座って話をしよう」

水際に椅子のような大きな岩がある。いつも釣りをするときの特等席だ。ちょうどふたりが座れるだけのスペースがある。少女は岩に足をそろえて座った。川風に髪が揺らいでいる。その横顔が、翔太に似ているのでドキリとした。

「わたし、ここからの風景大好きよ」

川の向こうに、ゴミ処理場が見える。安全そうな煙が、少し空中に漂っている。

「あそこの処理場で、わたしたちの排泄物がレンガなどに加工されているのよね」

そんなニュースを見たことがあった。でも今は、そんな話題に答える余裕などなかった。

「その...変な質問をするかもしれないけど、気を悪くしないでほしいんだ。いいかな？」

「ええ、もちろん」

不安そうな目を向けていた。

「君は...その、麻衣ちゃんは、いくつなの？」

「もう、すごく失礼な質問よ。でもお父さんが、困っているみたいだから、わたしも真面目に答えるわ。今は12歳、もうすぐ13歳、今年中学1年生になります」

「誕生日は？」

「4月18日」

娘の命日だった。

生きていたということか？ そんな馬鹿なことはない。自分が変な空間に迷い込んでしまったか、夢としか思えなかった。

「お父さんとお母さんの名前は？」

馬鹿にした質問だと思ったのか、少し頬をふくらませたが、真面目に答えだした。

いい子かもしれない。

「お父さんは、大島智久。41歳、A型のおひつじ座、13星座だと魚座ね。職業は会社員。会

社員といっても劇場の音響スタッフをしている。その前は放送局でニュースの取材をしていたのよね。わたしが生まれた時に、いまの劇場に転職したの。お母さんは大島麗子。37歳、A型のしし座、元銀行員、今は専業主婦。兄は翔太。2歳上で今年中学3年になるわ」

全て事実だった。

麻衣が亡くなった時、妻は精神的に不安定だった。僕は妻のそばについていたかった。元気づけてあげられるのは、僕しかいないと思っていた。その気持ちを大切にしていたかったので、時間がむらで休みが取りづらい報道局の仕事を、辞めることにした。長期休暇が認められなかったからだ。好きで始めた仕事だったが、僕にとって家族はひとつだ。仕事はたくさんある。そう思えるようになったときだった。

あのとき僕は、家族を守りたかった。

2歳になった翔太の面倒も、みなくてはならなかった。妻に子供が駄目だったという報告をした日から、毎日病室に通った。妻は一言も仕事のことは触れなかった。触れてしまうと僕が仕事に行ってしまうとでも、思っていたのだろうか。

落ち着いた頃を見計らって、妻に報告した。

「仕事は辞めたんだ。落ち着いたら新しい仕事を探そうと思う」

「嘘でしょう？」

その反応は、今まで休みもなしに働いていた、僕へのあてつけのようにもとれた。どうして、好きで始めた仕事を辞めたのかと問いつめられたが、心なしか妻の表情は明るかった。

「お金なら、多少は貯金があるだろう？ 子供を亡くしたんだ。ひとつの人生がはかなくも消えてしまったんだよ。仕事なんて小さなものさ。何をしたって生きていけると思うんだ。今は麗子についていたい。翔太の面倒を見ていたいんだよ。家族を放棄すると、自分自身が何のために生きているのか、わからなくなりそうだったんだ」

「いいのね。それで？」

「十分考えた上での、結論だよ」

自分で家族を持とうと思ったのだから、自分勝手な仕事はしていられなかった。麻衣が元気だったら、気づかなかったことかもしれない。麻衣が自分の死をもって、家族の大切さを、僕に教えてくれたような気がした。

妻は涙ぐんでいた。わかってもらえたと思った。

あれは12年前の、春の出来事。

あの時の麻衣が、生きていたとは考えられない。

では今、麻衣と名乗るこの少女は、いったい誰なのだろう？

「お父さん、もう家に帰ろうよ。夕御飯の用意もあるしね。最近、お母さんの手伝いしているのよ。偉いでしょ？」

相手にする気が起きなかったが、このまま置いて走り去るわけにもいかないので、道具を片づけると黙って歩き出した。麻衣は後ろから少し離れてついてくる。

「お父さん、急に無口になっちゃうんだもん。つまらない...」

小石をけりながら、ゆっくりとついてくる。家につけば、妻と翔太が味方になってくれるだろう

。とにかく帰ることにした。

隣の奥さんが、自転車で近づいてくるのが見えた。見知らぬ少女と歩いているところを見られて、変な噂を流されでもしたら大変だ。

でも、現実は違っていた。

「こんにちは、釣れましたか？ 麻衣ちゃんは、いつもお父さんといっしょに釣りにいくのね」

「だって、お父さんも釣りも大好きなんだもん。釣れなくてもね！」

何！ 斉藤さんが麻衣のことを知っている？ それも親しそうに挨拶を交わしているなんて・・・
斉藤さんは自転車を止めて、僕の顔をのぞき込んだ。

「大島さん、何だか元気ないわね」

返事などできる状態ではなかった。

「魚は釣れなかったし、お腹がすいたんじゃない？」

無邪気な麻衣の言葉に、斉藤さんは笑顔を戻した。

「そうなの？ わたしも買い物に行かないと」

「この時間にスーパーに行くと、お刺身が2割引で買えるからね」

「まあ麻衣ちゃん、よく知ってるのね。いい奥さんになるわよ。じゃあ失礼します」

「またね。おばさん！」

自転車が、こころなしか早く去っていった。僕は軽いおじぎをするのが精いっぱいだった。

「麻衣ちゃん、親しいのかい、斉藤さんと？」

「やめてよ。麻衣ちゃんなんて...だってお隣さんじゃない。本当に変よ。お父さん」

自分の記憶が信用できなくなることが、これほど不安になるとは思ってもいなかった。

とうとう、麻衣といっしょに家まで来てしまった。不安一杯のまま、玄関を開ける。妻が台所から顔をだした。

「遅かったわね。もうすぐ御飯よ。手、洗ってらっしゃい」

「ハイ」

麻衣が返事をして、洗面所にあがっていった。

「ちゃんと石鹼で洗うのよ。魚をさわったんでしょ？」

「今日は、お父さん、釣れなかったのよ。魚はさわってないわ」

「それは残念ね。それでも石鹼使ってよ」

「ハイ」

ごく普通の会話が流れていた。妻が玄関に突っ立っている僕に、げげんそうな顔を向けた。

「何しているの？ 翔太も帰ってきてるのよ」

翔太の靴が、玄関で踊っていた。

身体が自然と手を洗い、気がつくといつもの席に座っていた。

「あなた、何かあったの？ 変よ」

「お父さん、釣れなかったんだらう？ だから落ち込んでいるのさ」

翔太が、からかうように言った。

「そんなことで、大の大人が落ち込むわけではないじゃない」

妻は翔太に言う。

「男には女にわからない、こだわりがあるんだよ。これは僕とお父さんにしかわからない、男の気持ちなんだよね？」

「そんなところかな...」

帰ってからはじめて口を開いた。麻衣が僕と目を合わせてから、みんなに言った。

「今日のお父さん元気がないのよ。そうだ、朝作ったわたしの手作りプリンを、デザートにどうぞ。元気がでるわよ」

「ゲー、また作ったのかよ。これで5日間ぶっとおしだぜ」

翔太が、ずっこける真似をした。

「わたしはね。何事もきわめたいのよ。一流のプリン職人になりたい気持ちで一杯なんだから」

「まあ、それは初耳だわ。この間はクッキー屋さんじゃなかったかしら...とにかく食事にしましょう」

妻が僕をのぞきながら、ビールを注いだ。

「いただきます」

みんなの元気な声が響く。幸せな家族を客観的に見ているみたいだった。僕はビールをいっきに飲みほした。

食事の後、2階にある翔太の部屋を覗いてみると、ふたつに区切って麻衣の部屋を作っていた。元が8畳ほどの部屋だったので、ひとり4畳ほどのスペースになっている。入り口もふたつになっていた。

「狭くないか？ このスペースで...」

僕は翔太に聞いた。

「何言ってるんだよ今さら。お父さんがこうしたんだろう？ 他に部屋があったら、そっちに移るけど？」

部屋を区切っているのは、仕切り型2段ベットだった。互いに片方だけが使えるようになっている。翔太は上、麻衣は下を使っている。結構厚い部材を使っているので、お互いに干渉することはなさそうだ。天井まで壁が伸びているので、覗くこともできない。自分がやったことでも、感心してしまった。

「お父さん！ 麻衣の部屋に来ない？ 久しぶりでしょう？ 言っとくけど、お兄ちゃんは駄目だからね」

麻衣が壁越しに言った。

「バカ！ ガキの部屋に入れるわけないだろうが！ それよりも夜は静かにしているよ。これでも来年受験を控えた、受験生なんだからな。普通は大事にするものだぞ」

「わかってるわよ」

「そんなに、音が漏れるのか？」

僕は心配になった。

「ちょうど、寝ようとしている時に、タイミングよく音を出すんだよ」

麻衣が大きな声で言う。

「それって、お兄ちゃん。勉強しているんじゃなくて寝てるってことよね？」

「バカ！ そういう時もあるって言ってるんだよ！」

翔太は机に向かってノートを開いた。

「なるほどね。お父さんはちょっと試してみようかな。麻衣の方にも...」

立ち上がる僕に、翔太が言った。

「改築するときは言ってよね。地下室も作りたいし、いろいろと考えていることがあるんだよ」

「生意気を言うな。改築なんてできるわけではないだろう」

「なんだ、改築するんで悩んでいたのかと思ったよ」

じゃあ、何で来たんだというような態度をする翔太を尻目に、麻衣の部屋の扉を開けた。

「久しぶりよね。お父さんが部屋に入るの」

「ああ」

初めてだった。

部屋のいたるところに、大小のぬいぐるみが置いてあった。机の上はきちんと整理されている。

「ぬいぐるみが好きなのか？」

「そうよ。お父さんがいつも買ってくれるんじゃない？ お母さんはぬいぐるみに弱いでしょう。だから、この部屋を作ってもらったときから集めだしたのよ。お父さんだって買ってくれるのが好きなんじゃない？」

妻はほこりアレルギーなので、ほこりの固まりのようなぬいぐるみは、もっとも苦手だったのだ。

中学の制服がベットの横にかかっていた。麻衣も大きくなったものだ。でも、生まれてから、いままでの記憶がない。あるのは、麻衣が死んだという、拭いきれない記憶だけだった。そのギャップからか、自然と涙があふれてきた。

「お父さん、なんで制服を見て泣くのよ。花嫁衣裳じゃないのよ。中学生になるだけなんだからね」

「わかっているさ。知らない間に大きくなったから、びっくりしちゃったんだ」

「黙っていても、子供は成長するわ。ほら、子供の時もらったグローブなんて、手が入らないんだから」

麻衣は物入れに入っていた、赤いグローブを取り出して、手を入れて見せてくれた。グローブも買っていたとは...小さい時にキャッチボールをしたのだろうか？

このまま、回りが認めている麻衣を認めなくては、自分の存在を否定しなくてはならない。

「今日は、麻衣のいうように、お父さん少し調子が悪いみたいだ。もう寝るかな？ おやすみ」

「おやすみなさい。身体は大切にしてくださいね」

これ以上、初めて会った麻衣の前で涙を見せたくなかった。

ダイニングに戻ると、妻はテレビを見ていた。

「どうしたの？ 子供たちの部屋に行ったりして。嫌がったでしょう？ 最近、大奥みたいなんだから...掃除もさせないのよ。汚かったでしょう？ ねえ、何か飲む？」

「ビールにしようかな。疲れてるみたいだ」

わざと目頭を押さえた。

妻は冷蔵庫からビールを出すと、ふたつのコップに注いだ。

「あなた、本当に疲れているだけなの？...心配事でもあるんじゃないの？」

妻も僕がおかしいと思っているのだろう。

「いや、たいしたことはないんだ...麻衣が大きくなったんで、改めてびっくりしていたんだよ」

「あの頃の女の子は、父親には理解できないことが多いのよ。あなたの思いどおりにはいかないわ。でも、一緒に釣りに行くし、言うことも聞くわ。普通の子に比べたら、お父さんにべったりの方じゃないのかな？ わたしも嫉妬するくらいよ。自分の子供ながらも女を感じるのよね。釣りをしているときに

何か言ったの、あの娘？」

「何もないさ。それより今日は、麻衣とふたりで出かけたんだよね？」

「ええ、楽しそうに腕なんか組んでいったじゃない」

今日の記憶の中で、麻衣とは橋の下で会ったことになっている。

その記憶をごまかした。

「いつものことでも、意識していないと記憶に残らないものだね。もうすぐ麻衣の誕生日だったね。何か欲しがっていないのか？」

「あの子は、ぬいぐるみばかり。中学に入学したら、欲しいものでも出てくるんじゃないかしら」

「そうか、もう少し待ってみるか...麻衣が生まれた時、麗子は大変だったよね。思い出すよ」

「でも帝王切開だったから、自然分娩よりも楽だったかもしれないわ。翔太の時は、なかなか産めなかったから...術後が痛かったけど...その痛みも、子供を抱くと不思議と忘れちゃうのよね。産んだ苦しみは子供に救われるのよ。あなた、今さら何？...」

妻は無邪気に笑った。

僕の記憶によると、麻衣は麻衣の身体と母胎の安全のために、帝王切開で生まれた。妻は麻衣を抱くことなく、産んだ苦しみに闘っていた。

子供を産めば乳もでる。これは薬で抑えることができると知ったので、少しは気が緩んだのを憶えていた。

「今夜は早いけど寝るよ」

「無理しないでよ」

「ああ、おやすみ」

心配そうな妻の視線を痛いほど感じる。布団に入って自分の記憶を確かめることにした。現実と

違う記憶を。

麻衣は苦しむために、生まれてきたようなものだった。それに僕が、拍車をかけた。僕の判断がなければ、苦しまずにいれたかもしれない。

麻衣が妻に宿って6か月目の検診時に、異常がわかった。エコーという超音波で検査してみると、麻衣と妻を結んでいるへその緒が、大きく腫れあがっていた。『臍帯ヘルニア』と言われ、子供は助からないかもしれないことを、医者に宣告された。僕たちは小児科で有名な総合病院を紹介され、再度検査を受けることになった。

先生の診断は、この子をお腹の中で大きく育てて、産まれた時に手術をするということだった。へその緒の腫れは、ゆるんだか、腫瘍かの、2通りの考え方があるという。子供の内臓が、ゆるんだへその緒の中に出てしまっている場合は、分娩してから手術によって、内臓を体内に戻す方法があるという。でも、へその緒からの栄養が子供にいきわたらない場合があり、脳障害や奇形を引き起こすことがあるらしい。また、腫れが腫瘍だった場合はあきらめるしかないと言われた。とにかくお腹の中で大きく育てて、分娩後に手術をして助けるという道を選ぶしかなかった。

棄権はできない。

これだけ進んでいるように思える医学も、産んでみないとわからないとは、大したことないと思ったものだ。

僕たちがやらなくてはならないのは、お腹の子を大きく育てることだった。でも妻は泣きながら僕に言った。

「助からないとわかっている子を、お腹に抱いていられないわ...最後まで我慢できないかもしれない...」

と...

そんなとき、8か月目の定期検査で先生が希望を与えてくれた。手術のために、産婦人科と小児外科の先生が、エコーでお腹を見ている時だった。

「お腹のところを見てください。浮いているものがあるでしょう。これはこの子の肝臓ですね。他の臓器も出ている...」

僕は目の前が、真っ暗になったのを憶えている。恐る恐る聞いてみる。

「内臓が出ているということは、どういうことなんですか？」

「腹膜破裂ですね。お腹が破れてしまったんですよ。臨月になったら帝王切開で取り出して、この子のお腹の中に、内臓を戻す手術をすれば助かりますよ。今週も1件、同じような例がありました。お子さんは元気になっていますよ。手術の傷も3歳過ぎれば消えてしまいますから、心配ないと思います」

手術をすれば助かる。それに、子供の傷の心配ができるなんて、思ってもいなかった。

僕たちは先生の言葉を信じて、臨月近くまで頑張ることができた。

でも、9か月目で破水したため、緊急に帝王切開を行った。

待合室で待っていると、普通分娩で孫が生まれるというおばさんが、気軽に話しかけてきた。今、僕は子供の命の心配をしているのに、子供を産むのはつらくないという話題と、孫は男の子ら

しいというようなことを、楽しそうに話していた。気持ちは分かるが、こっちの気持ちも察してほしい。適当に相づちをうっていた。総合病院の有名な産婦人科なのではないが、気分のいいものではなかった。

待合室で、おばさんの話を聞いている僕を先生が捜しに来て、未熟児室に入るようにと言われる。先生との緊迫した会話を聞いてか、おばさんはようやく黙った。

未熟児室に入るには、殺菌のため白衣を着て、赤い液体石鹼で何度も手を洗わなくてはならなかった。看護婦さんに言われるとおりに、身体を動かしているにすぎない。頭の中は不安で一杯だった。妻が破水したとき、ほとんどが血液だったと聞いていたからだ。

プラスチックケースが並ぶ部屋の一番奥に、子供は寝かされていた。

女の子だった。女の子だったら麻衣という名前にしよう決めていた。

女の子らしい顔立ちが愛おしかった。翔太と似ていた。でも、頭よりも大きく飛び出したお腹が、ガーゼで包まれている。鼻には呼吸を助けるためなのか、チューブが引かれていた。

何かを言いたいのか？ 苦しいのか？ 口をパクパクと小刻みに動かしていたのが、脳裏に焼き付いている。

先生は言いにくそうに、カルテを見ながら話し始めた。

「はっきり言って状態は悪いです。腹膜破裂から臍帯破裂を引き起こしていました。今、手術をしても、助かる確立は30パーセント以下でしょう。臍帯をやられているので、障害が残るかもしれません。それに母体の中で、癒着していたので、背骨が曲がってしまっています」

僕は、呆然としてしまった。

「確立は低いけど手術をしてみるか、このまま、見守ってあげてはどうかと思うんですが...」

見守る？ 見殺しにしろというのか？

でも、助かる確率がないのならば仕方がない、という気になっていた。もし助かったとしても、普通の生活ができないのならば、麻衣のためにも、そして僕たちのためにも、自然にまかせるしかないだろう。親の力では何もできないことを、このとき痛感した。

「手術をしない場合は、どうなるのでしょうか？」

「それはわかりません。ただ、同じような症状で、3年くらい生存した例はあります」

僕は、手術をお願いした。

生き残る確立があるのならば、そうしてあげたかった。でも心のどこかに、手術をして助からなかったときのことを望んでいたのかもしれない。3年もベットの上で苦しませるなんて、考えられなかったからだ。

手術はてきぱきと行なわれた。内容を説明しながら、用意は行なわれていた。はみ出した内蔵を体内に押し込め、縫合する。そして、曲がっている背骨を矯正するのだそう。麻衣の身体にメスはいれるのだろうか？ 手術中、僕は後悔していた。自然にまかせるべきだったと...

手術は成功しなかった。

終了前に、麻衣が息耐えたのだ。異常分娩で産まれただけでも苦しいのに、手術まで行なってしまった。その最中に亡くなった。自分を責めていた。

僕は、トイレに駆け込みひとりすすり泣いた。顔を洗っても洗っても涙はでる。目は充血して

いた。

病院から紹介された葬儀屋と打ち合せを終えると、また先生に呼ばれた。

「この病気は原因がわかっていません。御両親のせいではないんです。交通事故にあったと思って、忘れられた方がいいと思います。ひとり目のお子さんは元気でいらっしゃるから、落ち着いたらまた、元気な赤ちゃんが産めますよ」

「...」

言葉を理解することができなかった。きっと、慰めているのだろうと思うしかなかった。

「同じような症状の人たちのために、娘さんのデータを採りたいと思うのですが、よろしいでしょうか？」

「調べるのですか？」

「解剖することは、今後のためにも必要なことだと思うのです。ご協力していただけないでしょうか？ もちろん、御遺体はきれいに処置しますので」

僕にとって今後の事など、考えられないことだった。これ以上、小さな麻衣の身体を傷つけてほしくない。断りたかったが、そこまで自分本位になれなかった。この病院ではこのようなことは毎日のことだし、僕たちよりも重病の人がたくさんいる。

そんな威圧感から、解剖に協力することにした。

「ではこの書類にサインをお願いします」

手が勝手に動いていた。

寢室のドアが開いて廊下の光が顔を刺した。涙が流れているのを妻に知られたくなかったので、まぶしいふりをして寝返った。

「あなた、起きてる？」

「眠い...もう寝るよ」

かすれた声で答えた。

「気分が悪かったら言ってね？ 病院はいつでも受け入れてくれるんだから」

「病気じゃないさ。でも、ありがとう。本当に大丈夫だよ」

「そう？ おやすみなさい」

妻は音をたてないように気を使い、隣の布団に入った。

この病院の出来事で、僕たち夫婦は人の気持ちを考えるということを教えられた。それが、僕たちに麻衣が残してくれたものだと思っていた。

では、この麻衣の記憶は現実なのか？ でも麻衣は存在している。考えれば考えるほど混乱してしまう。でも麻衣が生きている現実に流されなくては、頭がおかしいと思われてしまうだろう。もしかしたら、妻もこの現実をおかしいと思いながら、生活しているのかもしれない。翔太も...何でだ...何のために？

わからなかった。

確かめる勇気もなかった。

いつしか、ゆっくりとした妻の寝息が聞こえてきた。

「いってらっしゃい！」

朝、麻衣の元気な声に送られて出勤する。毎日そうしていたみたいに、受け入れていた。

事務所につくと大川さんに、互助会から麻衣の中学入学祝い金が出ていると、説明を受ける。口座に振り込むというので、そのようにしてくれと頼んだ。もう疑問は必要としていない。職場でも、そういうことになっているのだから。2日前に大川さんからもらった線香は、きっとどこかに消えてしまっているだろう。

劇場で催し物の仕込みが行われたが、予定時間よりも早く終わったので、早めに帰れることになった。最後のあがきとも思えるが、市役所に行って戸籍を調べることにした。

案の定、戸籍の上でも麻衣は、あの日に亡くなってはいなかった。

その後、しつこいかもしれないが墓まで足をのばしてみる。12年前に貯金をはたいて建てた墓だった。墓誌には麻衣の戒名が刻まれているはずだったが、何も書かれていない。住職に聞いてみても、あの時は墓だけを購入しただけで、仏様はいなかったと言われるばかりだった。

狂い始めているのは自分自身だったのだ。

現実を変えることはできない。家に帰るまでに、自分の記憶を閉じ込めようと考え始めていた。

「お父さん！」

駅からの帰り道を歩いていると、麻衣が自転車で近づいてきた。

「お帰りなさい。友達のところへ行ってたのよ」

「友達がいるのか？」

また変なことを言ってしまった。

「お父さん、友達くらい当たり前じゃない！ 中学になっても、同じクラスならいいねって...5・6年でいっしょだった、北山さんと松本さん」

「もうすぐ中学生だな」

「うん、あと3日」

「入学祝いと誕生日のプレゼントは、何が欲しい？ めいぐるみは駄目だぞ、中学生なんだから」

「めいぐるみは、いつでも買ってもらえるもの...もっと特別なものがないか？ でも、何もいらな
いわ。もうもらっているから...」

「誰に？ 何をもらったんだ？」

「お父さんとお母さんに...なんてね、センチメンタルなことは、わたしには似合わないわよね。
60色の色鉛筆が欲しいわ。絵を描きたいの」

「色鉛筆か...すごくいいと思うよ。贈りがいがある。贈ったものから、麻衣の描いた絵が生まれ
るなんて素晴らしいことだよ」

「ちょっとオーバーだけど、喜んでもらえてうれしいわ」

麻衣はてれくさそうに、僕を見上げた。

現実を受け入れて生活を始めると、とても快適だということが実感できた。麻衣は僕に対してな
れなれしかった。それが普通の父と娘の関係なのだろうか？ 息子は、自分もそうだったように、
親からは年齢と共にどんどん離れていってしまう。僕にとって娘をもったのは、2日前のこと
なので、まだなれていなかった。でも正直に言って、嫌な気分ではなかった。むしろ恥ずかしさ
の混ざった、ウキウキした気持ちに満たされていた。

家族4人の生活に慣れ始めていた。

不思議だと思わないように心がけている。そして次の休日も同じように始まった。

麻衣が階段を駆け下りながら言った。

「お父さん、今日休みでしょう？」

「日曜が休みだなんて、久しぶりだからな。何か用事でもあるのか？」

「釣りに行こう？ わたしがおにぎり作ってあげる」

妻が口を挟む。

「また行くの？ 麻衣もお父さんを休ませてあげて！ あなたも身体のこと考えてくださいよ。こ
の間だって...」

「麻衣と釣りに行くと、疲れもとれるよ。そうだ、翔太もいっしょに行くか？」

2階にいる翔太は、大きな声で返事をした。

「駄目！ 行かないよ。友達とゲームする約束があるんだ」

「お兄ちゃんは誘っても来ないわよ。自分勝手なんだから...行くと決まれば、おにぎりを作り
ましょう。お母さんは手伝わないでね。今日はひとりで作りたいの」

「わかったわ。頑張ってるね」

妻は苦笑いをした。

「お父さん。わたしはルアーで釣るからね。餌はいらないわよ」

「わかったよ」

妻が言った。

「釣りが好きなくせして、生きた餌は嫌いなんだから...」

「しょうがないじゃない。魚だって、本物の餌で釣られるよりも、ルアーの方が、失敗したな、自分が間違っただから、しょうがないって思うに違いないわ」

「麻衣の言う通りかもな...」

僕もルアーセットを用意することにした。

川につくと、初めて麻衣と会った橋の下を視野に入れながら、釣りのポイントを捜していた。でも自然と、いつもの橋のたもとで糸を投げた。

川の流れはよく分かっている。

「お父さん、ここは釣れそうにないわ」

麻衣がいつになく、弱気になった。

「そうかな？ 少し投げてみよう。魚はいるんだ」

すぐに麻衣もその気になり、ふたりで竿を振る。2回ほど投げると、背後から女性の声が聞こえた。

「釣れてますか？」

麻衣の身体が、ビクッと震えた。

そこには25歳くらいの女性が、僕たちを見つめていた。ビシッとした紺のスーツに身を包んでいる。彼女は近づいて言った。

「お待ちしてました」

またか？

今度は1番上の娘とでも言うのだろうか？ それとも愛人か？...

混乱していた。

僕が何も言えずにいると、麻衣が口を開いた。

「あーあ、先生...もう見つかったの？」

知っている先生なのだろうか？ 中学生？ 小学生の時か...

「当たり前でしょう？ いけない遊びよ、こういうことは...この世界のデータは、変更してはいけないことになっているでしょう？ 見るのはいいけど、自分で入ってはいけないことは、知っているはずよ？ 常識だわ」

麻衣はペロッと小さな舌を見せて、うつむいてしまった。

何のことだか、さっぱりわからなかった。

「この世界を、この世界の人の目で見ても見たかったんです。データは余り変えていません」

この世界？

データ？

ふたりの会話は、全くわからなかった。

僕は恐る恐る質問をした。

「あの、どういうことなんでしょうか？ 先生はいったい...」

質問が終わる前に、先生が答え始めた。

「ごめんなさい。本当のことを話しても、大島さんには理解できないと思います」

麻衣が顔を上げて、僕を見つめて言う。

「お父さんにはお世話になったから、本当のことを言いたいわ...でも話してはいけないことなのよ」

すぎるような瞳で僕を見ていた。いままでの少しの言葉から、頭の中ではいろいろな想像が渦巻いていた。

麻衣はこの世界のデータを変えて、この世界に入り込んだ。データというのは妻や翔太...麻衣に関わる全ての人たちの記憶なのだろう。そして、この世界を内側から見てみた...生活してみたのだろうか？

ならばなぜ、僕の記憶を奪わなかったのだろうか？

僕だけ忘れたのだろうか？

それよりも、このふたりは何処から来たのだろうか？ データ...記憶を変えることができるとするならば、僕には考えつかない世界から来たのかもしれない。

余りにも現実かけ離れた想像ばかり浮かぶので、答えなど見つからなかった。

麻衣が言う。

「お父さん、とても楽しかったわ。いい勉強にもなった。わたしを愛してくれて、ありがとう。回りの状況や記憶を変えたのは、わたしです。お父さんは、だいぶ悩んでいたみたいだった。つらかったでしょう？ 謝ります。ごめんなさい。でも、わたしもお父さんに、受け入れられなかったら、どうしようかとドキドキものだったのよ」

「何で、僕の記憶だけ、そのままにしておいたんだ？ みんなのように、変えればよかったのに」

「わたしは、そのままの...本当のお父さんに会いたかったんです」

「何で、僕なんかを選んだんだ？ もっといい人はたくさんいるのに...」

「一度でいいから、大島智久さん、麗子さんと一緒に暮らしてみたかったのよ」

「駄目よ！ それ以上は！」

先生が麻衣の言葉をさえぎった。でも麻衣は真剣な顔で続けた。

「お父さんの記憶を書き換えなかったのは、本当のわたしを抱いてくれた、この世界でたったひとりの肉親だからなの！」

麻衣？ 本当の麻衣なのだろうか？ 生まれてまもなく死んだはずなのに、違う世界で生きていたのだろうか？ 混乱していた。

先生が僕たちの間に、立ちふさがった。

「麻衣さんが書き換えたデータは、全て元に戻します。ご迷惑をおかけしました。大島さんの記憶も少しいじらせてもらいます。さあ、行きましょう」

「先生、もう少しお願い！」

麻衣は先生にすぎた。先生は仕方がなさそうに、気をゆるめてくれた。また、データを書き替えれば済むと、思ったのだろう。麻衣は、先生に軽く頭を下げた。

「でも、お父さん。今回の経験で、わたしは家族の中では、邪魔なんだってわかったの。ここに存在してなくて、よかったんだって...」

急に麻衣は弱気になったようだ。

「どうしたんだ急に！ 何を言い出すんだ。麻衣らしくないぞ」

「お父さんはずっと、わたしのことを認めてくれないし、お兄ちゃんには部屋が狭いから静かにしろって、いつも言われる。まるでわたしがいるから、こんなに狭くなったんだって言われてい

るみたいで...お母さんは、お父さんと仲良くしていると機嫌が悪くなる。わたしは所詮、家族ではないって、それがわかったの」

「そんなことはないさ。それは、麻衣自身が迷っているからだと思うよ。家族だって、傷つけあって生きているんだ。許せるか許せないかの違いだと思う」

「12年の空白があったからなの？」

「違う。麻衣はいつでも家族の一員だよ。僕たちが戸惑っていたのかもしれない。謝るよ」

「謝らないで！ 他人にするようなことしないで！ そんな言葉なんていらぬ。さっき言ったわ。家族も傷つけあって生きているって」

「そうだね。家族なんだから、言葉がなくても許しあえる」

「そのとおりよ。...確かにわたしは、みんなを試すように生活していた気がするわ。素直にしていればよかった。恐がらずに、思いっきり、わがまましていればよかった...」

先生が麻衣の肩に、手をかけて言った。

「さあ、行きましょう」

橋の下の空間がにじんで見えた。麻衣はさよならも言わずに、先生に従い、橋のたもとの暗闇の中に吸い込まれていく。

12年前の麻衣がだぶって見えた。また、さよならなのだろうか？ 麻衣が僕の前に現れてから、正直言って戸惑い続けていた。いくら現実を受け入れようとしていても、受け入れられなかった。でも今、消えようとしている麻衣を引き戻したい気持ちが、全身を襲っていた。思わずふたりに近づいて、麻衣の手をつかもうとしたが、空を握るだけでつかめなかった。

麻衣が、にじんだ空間から、振り向いて言った。

「お父さんありがとう。本当にさよならね」

「もう来られないのか？」

「うん、もう来られない...無茶しちゃったもん。笑って送ってね。わたしたち、家族だもんね」

麻衣は涙を拭って笑顔を見せた。

「ああ、会えてよかったよ。12年前に麻衣は、家族を大切にすることを僕たちに教えてくれた。おかげで、しっかりとした家族だって胸を張って言えるよ。麻衣のおかげなんだ。今回も、麻衣がいることを素直に喜べばよかったんだ。だから、いつ麻衣が戻ってきても大丈夫さ。許されるならいつでも戻っておいで...」

「そう言ってくれると、うれしい！」

涙がこみ上げてくるが、顔は笑っていた。12年前の麻衣とはできなかった、家族としての生活と会話のできた嬉しさに、感動していた。

暗闇が広がり、ふたりを包み込んでいく。自分の記憶も吸いこまれそうだった。

あたりが静かになった時、気がついた。なれていた麻衣の香りが、消えたことを...

なれないルアー釣りをしていると、早くもお昼になってしまった。何でルアーなんかで、釣ろうと思ったのかわからなかった。川の流れに合わせて、竿を動かしていなくてはならないので疲れるのだ。それに川では思ったように釣れない。

竿をあげて、リュックに入っていたお弁当を開けてみると、美味しそうなおにぎりが顔を出した。食べようとする、おにぎりに海苔で字が書いてあった。

「スキ」

何で、いまさら妻がこんなものを作ったのかわからなかった。胸騒ぎと、切なさが僕を襲った。こんな気持ちで竿を動かしてられない。魚の顔を見ずに帰宅することにした。

「ただいま」

妻は庭に植えてある、ハーブの手入れをしていた。

「おかえりなさい。早かったのね」

自然とふたりで縁側に座った。

「翔太は？」

「友達のところじゃないかしら？ 新しいゲームが手に入ったって言っていたから」

「そうか」

「何、慌てているの？」

「いや、何だか胸騒ぎがして...気のせいだと思うけど」

「変なこと言わないでよ。そうか？ そうよ。きっともうすぐ、麻衣の命日だから、落ち着かないんじゃないの？ あなたは毎年そうだから...」

「もうそんな時期になるのか...生きていれば、今年は中学入学だったな」

「大きくなっているでしょうね。きっと...お墓参りに行きましょうね。命日に持っていきたいものがあるのよ」

「何だい？ 持っていきたいものって？」

「色鉛筆」

「色鉛筆？」

「変かしら？」

「いや、僕も同じことを考えていたんだよ」

「麻衣は描くことができないけど、描ける環境...ううん、道具だけでも与えてあげたいの...なんだか、急にそんな気持ちになったのよ」

「お墓に絵を描かれたらどうする？ 大変だぞ」

「わたしは残しておきたい。いつまでも...もしも他のお墓に、イタズラ書きをしちゃったら、一生懸命に消すから心配しないで」

それぞれの心の中で、それぞれの麻衣が生きている。

何だか、12年前に亡くなったとは思えない切なさを、僕たちは味わっていた。